

三木清名言集

江川剛史
(編集)

この本は、
三木清を知らない全ての人に捧げます。

三木 清

(みき きよし、1897年1月5日 - 1945年9月26日)は、
(西田左派を含めた上での)京都学派を代表する哲学者。

[生涯]

兵庫県揖保郡平井村小神(現・たつの市揖西町)出身。
第一高等学校から京都帝国大学に進み、西田幾多郎に師事する。
大学卒業後は大谷大学、龍谷大学で教鞭をとる。
1922年には岩波茂雄の資金的な支援を受けてドイツに留学。
ハイデルベルク大学で歴史哲学を研究した。

1923年にはマールブルク大学に移り、
マルティン・ハイデッガーに師事。
フリードリヒ・ニーチェや
セーレン・キェルケゴールの実存哲学への興味を深めた。

1924年にはパリに移り、大学に席を置かず、
フランス語の日用会話の勉強をした。この間パスカル研究を開始。

1925年帰国し、翌年には処女作
『パスカルに於ける人間の研究』を発表。

1927年には法政大学文学部哲学科主任教授となった。

羽仁五郎らと雑誌『新興科学の旗のもとに』を起こして、
たんなる党派的な教条にとどまらない
マルクス主義の創造的な展開も企てたが、
1930年、日本共産党に資金提供をしたという理由によって逮捕され、
転向をよぎなくされた。

不当な有罪判決によって公式には教職に就けなくなった三木は、
活動の場を文筆活動に移していった。

1930年に一人娘「洋子」が生まれる。

その後、ジャーナリズムで超人的な健筆を振るう日々が続くが、1930年代後半には、後藤隆之助ら近衛文麿の友人たちが中心になって組織した「昭和研究会」に積極的に参加し、その哲学的基礎づけ作業を担当した。

三木はその際、「協同主義」という一種の多文化主義的な立場を掲げた。これは軍部の独走によって硬直する日中関係に対する日本の側からの新政策につながるものとして、いったんは期待をあつめたものの、中国の側からの知的応答もなく、現実的な力はもたないうちに、短期間に色あせた。

総力戦体制に対する抵抗と関与という両義的な態度は、同時代の転向知識人がかかえる二面性であるが、三木はその典型であった。

「昭和研究会」は軍部や保守勢力によって敵視され、不本意にも解散をよぎなくされたため、やがてその流れは、大政翼賛会のなかに取り込まれていく。

1945年、治安維持法違反の被疑者高倉テルを仮釈放中にかくまったことを理由にして検事拘留処分を受け、東京拘置所に送られ、その後に豊多摩刑務所に移された。

この刑務所は衛生状態が劣悪であったために、三木はそこで疥癬をやみ、また腎臓病の悪化とともに、体調を崩し、終戦後の9月26日に独房の寝台から転がり落ちて死亡していることが発見された。48歳没。終戦から一ヶ月余が経過していた。

1997年、龍野市から名誉市民の称号が与えられた。

・如何に読書すべきか

著者 三木清

先ず大切なことは読書の習慣を作ることである。

by 三木清

読書の時間がないと云うのは読書しないための口実に過ぎない。

by 三木清

読書は心に落ち着きを与える。

by 三木清

読書を欲する者は閑暇を見出すことに賢明でなければならぬと共に、規則的に読書するということを忘れてはならない。

by 三木清

毎日、

例外なしに、

一定の時間に、

たとい三十分にしても、

読書する習慣を養うことが大切である。

かようにして二十年間も継続することができれば、

そのうちにひとは立派な学者になっているであろう。

by 三木清

落ち着いた大学生といわれる者は

たいてい読書の習慣を有するものである。

by 三木清

読書は一種の技術である。

by 三木清

すべての技術には一般的規則があり、
これを知っていることが肝要である。

by 三木清

昔から同じ教訓が絶えず繰り返されてきたにも拘りかわらず、
人類は絶えず同じ誤謬を繰り返しているのである。

by 三木清

あやまちを為すことを恐れている者は何も掴つかむことができぬ。

by 三木清

人生は冒険である。

恥ずべきことは、誤謬を犯すということよりも寧むしろ
自分の犯した誤謬から何物をも
学び取ることができないということである。

by 三木清

多読家でないような読書家があるであろうか。

by 三木清

何を読むべきかに就いては、
もちろん、善いものを読まねばならず、
悪いものを読んではならぬということは明かである。

by 三木清

古典を愛しないような真の読書家はなく、
古典についての教養を有しないような真の教養人はない。

by 三木清

古典を読むことが大切である如く、
ひとはまたつねに原典を読むように心掛けねばならぬ。

by 三木清

例えばプラトンとかカントとかについて千の文献を読むにしても、原典を読むこと、これを繰り返して読むことをしないならば、深く根本的に学ぶことができぬ。

by 三木清

多数の参考書を読むよりも一冊の原典を繰り返して読むことがそのものを掴むのに結局近道である。

by 三木清

読書においてもひとは自主的でなければならず、発見的であることが大切である。

by 三木清

或る本はむしろ走り読みするのがよく、また或る本はその序文だけ読めば済み、更に或る本はその存在を知っているだけで十分である。

by 三木清

理解は批評の前提として必要である。

by 三木清

発見的に読むということが最も重要なことである。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「読書と人生」新潮文庫、新潮社

1974(昭和49)年10月30日発行

1986(昭和61)年9月30日20刷

初出:「学生と読書」

1938(昭和13)年12月

入力:Juki

校正:小林繁雄

2010年1月5日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

語られざる哲学

三木清

懺悔は語られざる哲学である。

by 三木清

すべてを ab ovo (始めから) に始めるために
過去を食いつくしてしまわなければならない。

by 三木清

よき魂は謙虚な魂であり、
そしてよき魂のみがよき仕事を成し遂げることができる。

by 三木清

第一、いかにしてよき生活は可能であるか。

第二、よき生活はいかなるものであるか。

by 三木清

「私は自分の間違っていたことを知り、
いかにしてその間違いができたかを会得した。
私が間違いをしていたのは、
私の考え方が正しくなかったというよりもむしろ、
私が忌わしい生活をしていたからであることを知った。

by 三木清

真理が私に隠されていたのは、
私の推理が誤っていたというよりも、
私が肉の煩悩を満足させようとして、
法外な道楽者の生活を送っていたからであることを知った。」

by 三木清

有名なデカルトはその哲学の出発点に当ってすべてを疑った。
単に伝統や証権やが教えるものばかりでなく自己の感官、
進んでは自己の理性の指示するところのものをも疑った。

De omnibus dubitandum. (あらゆるものを疑ってみなければならぬ)

しかして彼が方法論的懐疑といわれるものの最後に到達した真理は
Cogito ergo sum. (われ思う、ゆえにわれ在り)ということであった。

この絶対に疑い得ないと信ぜられた真理から出発して

彼は因果律を用いて神の存在を証明し、

かくして最初には疑われたものを

懐疑の中から救い得ることを論証しようとした。

by 三木清

私はひとかどの思想家のつもりで

他のまじめに学業に励み教訓に忠実な人々を蔑んだ。

by 三木清

私が悪事をなしたとき私の魂は悲しんだ。

by 三木清

人々はしばしば次のように語る、

懐疑は疲れ、

傷つき、

病める心のことであって、

健康で活動する心の知らないことであると。

by 三木清

真の懐疑は柔弱ではなくて剛健な心、

自分自身をも否定して恐れぬ心、

ヘーゲルの言葉を用いるならば

真理の勇氣 (Der Mut der Wahrheit) をもった心において可能である。

by 三木清

精力はあり、
知識慾は人一倍強く、
それに虚栄心や野心も盛んであった私は、
学問のあらゆる分科にわたって手当たり次第に新しきものを求めた。

by 三木清

時に疑いを生ずることがあっても、
私は私が接するであろう新しき思想、
新しき書物によって解決され得るものと漠然と考えて、
これを自らに求めて解決しようなどとはしなかった。

by 三木清

私は殆んど本能的な活動慾に駆られて
私の目の前に現われる何物にでも手を動かした。

by 三木清

私はいま何が正しく
そして何が誤っているかを
はっきりと見定めることができるように思う。

by 三木清

人生の本質、
一般に実在の本質は活動にある。
それゆえにあるものが
偉大なる力を発揮してはたらけばはたらくほど、
そのものの実在性と価値とは大である。
誤りはその活動が正しき方向に向って
またにおいて行われたいというところに存する。

by 三木清

誤っているのは活動そのものではなくして
理想のない盲目的な活動である。

by 三木清

私は剛情で片意地であった。

by 三木清

私は自分の意志することはなんでも成遂げられると信じていた。
そして私は私の注目に値したすべての種類の人になることを
次から次へと空想して行った。

政治家、弁護士、法律学者、文学者、批評家、
作家、新聞記者、哲学者……。

by 三木清

二、三の友だちは私にこういった、

「君は不幸に逢わなければよくなれない。

君は大きな打撃にぶつかる必要がある。」

私はいまそれらの言葉をもう一度はっきりと思い起して、

その意味を自分で適当に解釈しながら

しみじみと味ってみる必要がある。

それは何より先に謙遜なる心の回復を

意味するのでなければならない。

しかるに謙虚なる心は小さい自我を通す喜びによってよりも

それを粉碎する悲しみによって得られるのである。

by 三木清

険しい道に由より狭い門をくぐって私たちは天国に入るのである。

この世の智慧を滅ぼすとき神の智慧は生れる。

by 三木清

才能もあり智恵や徳もあった多くの人たちでさえ、
もっと険しい道を通って来たのに、
それらをもっていない私が安全な道に由って
完全に至ろうということほど考え難いことがまたとあるであろうか。
私は決して苦しみを恐れてはならない。

by 三木清

私に哲学上の教養があったとするならば、
それは“someone said”の哲学に関してであった。
しかしながら貨幣の種類を
たくさんに示し得る人が必ずしも金持ではない。

by 三木清

私の活動性がいかに自己を忘れて
外なるもの新しきものに向わせようとしても、
私は私の裏に感ずる惱しい自我に対して
全く無頓著であることができなかった。

by 三木清

明確なるもの、
論理的なるもの、
概念的なるものに興味を失って、
非合理的なるもの意志的なるものに共鳴するようになった
私が最初に得たのはショーペンハウエルの哲学であった。

私はいつとはなしにニイチエに移って行った。

by 三木清

私は外に向うべき眼をもって自己の内を見ているようだ。

by 三木清

私は年も若いし経験も貧しい。
けれど私の心は次のように私に答えさせる。
「私は何も知りません。
ただ私は純粋な心はいつでも夢みるものだと思っています。」

by 三木清

反省とは自分自身を知るということである。

by 三木清

「汝自らを知れ」という古い昔から幾度となく繰返された、
けれどそれを身に徹して行うことは非常に困難である一句を、
いやしくも自分自身において深く生きようとするものは、
まず何よりも謙虚な心とならなければならない。

by 三木清

ふまじめと傲慢とにおいてではなく、
真摯と謙虚とにおいて自分自身は初めて知られ得る。

by 三木清

煩惱具足の私たちは罪を作らずにはいられないような状態にいる。

by 三木清

弁解は知能や弁舌においてではなく、
ただ精神と行為とにおいてのみ成功するところのものである。

by 三木清

絶対にへりくだる心とそれから出た
よき行為とのみか雄弁に弁解することができる。

by 三木清

私は傲慢にも神を試みようとはしなかったか。

by 三木清

闇を闇として感ずる心は光を見た心である。

by 三木清

私たちの魂はアイデアの世界に生れて
アイデアの世界を知っておればこそ、
身は肉体の牢獄の中にながら
アイデアの世界を憧れ求めることもできるのである。

by 三木清

夢とは永遠なるものに酔う心である。

by 三木清

よき生活を生きようとする人が
最初に獲得しなくてはならぬものは素直な心である。
そして素直な心の特質は謙虚と剛健とである。

by 三木清

個性とは傲慢な心には知られないようなものである。

by 三木清

個性の真の認識は心理学の知識ではなくて反省の知識である。

by 三木清

自己に目覚める心はやがて他人に目覚める心である。
自分自身に次第に深く目覚めてゆくに従って、
私たちの他の人格を理解する深さと広さとは
それだけ次第に増大してゆくのである。

by 三木清

編集:江川剛史
文章:青空文庫

底本:「語られざる哲学」講談社学術文庫、講談社
1977(昭和52)年6月10日第1刷発行
1978(昭和53)年2月10日第2刷発行

※混在している「憂鬱」と「憂鬱」、
「無頓着」「執着」と「無頓著」「執著」は底本通りとし、
統一しませんでした。

入力:大野晋

校正:小林繁雄

2000年10月2日公開

2006年4月15日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

危機における理論的意識

三木清

真理を求める思想家にとっては、
思想の危機はまさに歓迎すべきものである。

by 三木清

真実に人生を生きようと欲する者は、
生活における危機の経験がかえって人生を豊富ならしめ、
一層真実ならしめることを知っている。

あたかもそのように、
真理を追うてやまぬ者は、
思想の危機がまさしく思想を具体的ならしめ、
一層真理ならしめることを理解する。

by 三木清

思想の性格を表現する言葉には、
善、
悪以外に、
危険、
穏健、
反動的、
過激的など、
その他のものがある。

by 三木清

危機にあるのは思想そのものではなくて、
かえって社会そのものなのである。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

初出:「改造」

1929(昭和4)年1月号

入力:文子

校正:川山隆

2008年1月23日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軽蔑された翻訳

三木清

言葉を愛することを知らない者に好い文章の書ける筈がない。

by 三木清

ひとは自分自身の思想を求め、

形作るとき、

自分自身の言葉を求め、

形作る。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「読書と人生」新潮文庫、新潮社

1974(昭和49)年10月30日発行

1986(昭和61)年9月30日20刷

初出:「文芸春秋」

1931(昭和6)年9月

入力:Juki

校正:小林繁雄

2010年1月5日作成

2010年1月19日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

辞書の客観性

三木清

辞書は引くもので、
読むものではないといふのが通念であらう。
だが私は今、
この考へ方を改めて、
辞書は読み物であり、
しかも恐らく最上の読み物の一つであると思つてゐる。

by 三木清

語学の辞書なども面白い読み物であるといへる。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「日本の名随筆 別巻 74 辞書」作品社

1997(平成9)年4月25日第1刷発行

底本の親本:「三木清全集 第一七巻」岩波書店

1968(昭和43)年2月

入力:小原遼

校正:小林繁雄

2008年1月19日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです

人生論ノート

三木清

近頃私は死といふものをそんなに恐しく思はなくなつた。
年齢のせみであらう。

以前はあんなに死の恐怖について考へ、
また書いた私ではあるが。

by 三木清

私はどんなに苦しんでゐる病人にも
死の瞬間には平和が來ることを目撃した。

by 三木清

幸福は徳に反するものでなく、
むしろ幸福そのものが徳である。

by 三木清

幸福は人格である。

by 三木清

人生において或る意味では習慣がすべてである。

by 三木清

習慣によつて我々は
自由になると共に
習慣によつて我々は束縛される。

by 三木清

名といふのは抽象的なものである。

by 三木清

嫉妬は性質的なものの上に働くのではなく、
量的なものの上に働くのである。

by 三木清

嫉妬とはすべての人間が
神の前においては
平等であることを知らぬ者の人間の世界において
平均化を求める傾向である。

by 三木清

嫉妬は出歩いて、
家を守らない。

by 三木清

自信がないことから嫉妬が起るといふのは正しい。

by 三木清

人間は物を作ることによつて自己を作り、
かくて個性になる。
個性的な人間ほど嫉妬的でない。

by 三木清

幸福は各人のもの、
人格的な、
性質的なものであるが、
成功は一般的なもの、
量的に考へられ得るものである。
だから成功は、
その本性上、
他人の嫉妬を伴ひ易い。

by 三木清

努力家型の成功主義者は、
決して軌道をはづすことがない故に、
それだけ俗物として完全である。

by 三木清

成功のモラルはオプティミズムに支へられてゐる。

by 三木清

勤勉は思想家の主要な徳である。

by 三木清

ひとは書きながら、
もしくは書くことによつて思索することができる。

by 三木清

精神には仕事と同様、
閑暇が必要である。

by 三木清

噂は不安定なもの、
不確定なものである。

by 三木清

噂は過去も未来も知らない。
噂は本質的に現在のものである。

by 三木清

ほんとに歴史的になつたものは、
もはや噂として存在するのではなく、
むしろ神話として存在するのである。

by 三木清

知識だけでは足りない、
能力が問題である。

by 三木清

プラトンの中でソクラテスは、
徳は心の秩序であるといっている。

by 三木清

他の人間の作り得ないものを
作り得る人間が知識人であった。

by 三木清

人格とは秩序である、
自由といふものも秩序である。

by 三木清

すべての思想らしい思想は
つねに極端なところをもっている。

by 三木清

生活を楽しむことを知らねばならぬ。

by 三木清

「生活術」といふのはそれ以外のものでない。

それは技術であり、
徳である。

by 三木清

幸福について
ほんとに考へることを知らない近代人は
娯楽について考へる。

by 三木清

生活を楽しむ者はリアリストでなければならぬ。

by 三木清

人生においては何事も偶然である。

しかしまた人生においては何事も必然である。

by 三木清

偶然のものが必然の、

必然のものが偶然の意味をもつてゐる故に、

人生は運命なのである。

by 三木清

希望は運命の如きものである。

by 三木清

人生は運命であるやうに、

人生は希望である。

運命的な存在である人間にとって

生きてゐることは希望を持つてゐることである。

by 三木清

愛もまた運命ではないか。

by 三木清

希望に生きる者はつねに若い。

by 三木清

人生がさまざまであるやうに、

旅もさまざまである。

by 三木清

旅は何となく不安なものである。

by 三木清

いつたい人生において、
我々は何處へ行くのであるか。
我々はそれを知らない。

by 三木清

自己を知ることはやがて他人を知ることである。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「三木清全集 第一巻」岩波書店

1966(昭和41)年10月17日発行

初出:下記以外「文学界」

1938(昭和13)年6月～1941(昭和16)年10月

個性について「哲學研究」

1920(大正9)年5月

後記「人生論ノート」創元社

1941(昭和16)年8月発行

旅について 不詳

※「「褒」の「保」に代えて「丑」は
「デザイン差」と見て「衰」で入力しました。

入力:石井彰文

校正:川山隆

2008年1月26日作成

2014年2月24日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

親鸞
三木清

親鸞の思想の特色は、
仏教を人間的にしたところにあるというように
しばしば考えられている。

by 三木清

自己の告白、
懺悔は内面性のしるしである。

by 三木清

親鸞が全生命を投げ込んで求めたものは
実にこのただ一つの極めて単純なこと、
すなわち真実心を得ること、
まごころに徹することであった。

by 三木清

われが自己の現実を語るのではなく、
現実そのものが自己を語るのである。

by 三木清

もとより諸行無常は現実である。

by 三木清

すべては生成し消滅し変化する。

by 三木清

生老病死は無常なる人生における現実である。

by 三木清

無常感はそのものとしては宗教的であるよりも美的である。

by 三木清

自己は単に無常であるのではない、
煩悩の具わらざることのない凡夫、
あらゆる罪を作りつつある悪人である。

by 三木清

現在のこの現実が問題である。

by 三木清

無戒者は無自覚者である。

by 三木清

特殊であると同時に普遍的であり、
時間的であると同時に超時間的であるところに、
真の絶対性があるのである。

by 三木清

念仏はあらゆる人において同一であり平等である。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日発行

初出:「展望」

1946(昭和21)年1月

入力:川山隆

校正:松永正敏

2007年11月16日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

政治の論理と人間の論理

三木清

オプティミスティックな政治主義が考えるように、
簡単にこの悲劇がなくなるとは想像され得ず、
かえって悲劇は歴史の本質であるように思われる。

by 三木清

政治の論理に対する人間の論理の批判がなくなる場合、
政治は狂気になるであろう。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

初出:「セルパン」

1937(昭和12)年8月号

入力:文子

校正:川山隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです

生存理由としての哲学
——哲学界に与うる書——
三木清

時代は行動を必要とする、
あらゆるものが政治的であることを要求している。
by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月31日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

初出:「読売新聞」

1933(昭和8)年4月19日

入力:文子

校正:川山隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

哲学入門

三木清

或る意味においてすべての人間は哲学者である。

言い換えると、

哲学は現実の中から生れる。

そしてそこが哲学の元来の出発点であり、

哲学は現実から出立するのである。

by 三木清

現実是我々に対してあるというよりも、

その中に我々があるのである。

我々はそこに生れ、

そこで働き、

そこで考え、

そこに死ぬる、

そこが現実である。

by 三木清

哲学は、

それにあたるギリシア語の「フィロソフィア」という

言葉が意味するように、

知識の愛である。

by 三木清

人間と環境とは、

人間は環境から働きかけられ

逆に人間が環境に働きかけるという関係に立っている。

by 三木清

我々は先ず経験によって知るのであって、
経験は知識の重要な源泉である。

by 三木清

常識は科学化されねばならないし、
また科学は常識化されねばならない。

by 三木清

常識が科学的になるところに文化の進歩がある。

by 三木清

自覚というのは自己が自己を知ること、
自己が自己を意識することである。

by 三木清

真理はしばしば
万人に反対して叫ばれるのである。

by 三木清

人により、
処により、
時代によって、
真理とされるものは違っている。

by 三木清

すべての道徳は、
ひとが徳のある人間になるべきことを要求している。
徳のある人間とは、
徳のある行為をする者のことである。
徳は何よりも働きに属している。

by 三木清

いかなる活動、
いかなる行為が徳のあるものと考えられるであろうか。

by 三木清

真に自己自身に内在的なものが
超越的なものによって媒介されたものであり、
超越的なものによって媒介されたものが
真に自己自身に内在的なものであるというところに、
使命は考えられるのである。

by 三木清

使命に従って行為することは、
世界の呼び掛けに応えて
世界において形成的に働くことであり、
同時に自己形成的に働くことである。

by 三木清

人間は使命的存在である。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「三木清全集 第七巻」岩波書店

1967(昭和42)年4月17日発行

底本の親本:「哲学入門」岩波新書、岩波書店

1940(昭和15)年3月発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、
現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、
底本の表記をあらためました。

ルビはすべて、「作業指針」に基づいて付けた加えたものです。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「恰も→あたかも 乃至→ないし 如何→いか・いかん」

入力:kompass

校正:石井彰文

2007年4月12日作成

2012年7月19日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

読書遍歴

三木清

私自身は、
小学校にいる間、
中学へ入ってからも初めの一、
二年の間は、
教科書よりほかの物はほとんど何も見ないで過ぎてきた。
学校から帰ると、
包を放り出して、
近所の子供と遊ぶか、
家の手伝いをするというのがつねであった。

by 三木清

中学時代、
私の得意としたものがあるとすれば、
それは歴史であった。

by 三木清

孤独な青年が好んでおもむくところは宗教である。

by 三木清

第一次世界戦争という大事件に会いながら、
私たちは政治に対しても全く無関心であった。
あるいは無関心であることができた。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

初出:「文芸」

1941(昭和16)年6月号～12月号

入力:文子

校正:川山隆

2007年1月7日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日記と自叙伝

三木清

三つの種類の人間がある。
先づ他人の私事に妙に関心し、
とりわけいはゆる醜聞を、
ことに世間に名の知られた他人の醜聞を愛する人間がある。
彼等はさういふ興味からいはゆる三面記事事件を喜ぶ。

by 三木清

第二の種類の間は特にいはゆる
英雄伝や偉人伝を読むことを好むやうに見える。
彼らはとにかく偉い人になりたい、
なんでも成功したいといふ心に燃やされ、
教訓的見地からつづられた「実用的歴史」を愛し、
或ひは名士の成功談なるものによつて感激させられることを欲する。

by 三木清

然し第三の種類の人間がある。
私はこの種類の人間のひとつの特徴をとらへて、
彼等をば日記や自叙伝を読むことを
愛する人間といふことができはしないかと思ふ。
彼等は他人の私事の秘密をのぞくことを徒らに好むのではない。
けれども彼等は他人の生活に無関心なのでなく、
それを理解することを欲する。
然しそのことは自己を理解せんがためである、
いな、人間と生とを理解せんがためである。
また彼等は他人のいはゆる成功や英雄的行為によつて
徒らに感激させられることを喜ぶのではない。
むしろ彼等は平凡な人生の複雑微妙、
世のつねのすがたの面白さ、
深さを理解することを求めるのである。

by 三木清

日記についていへば、
淡々としてただ事件を叙したのに案外面白いものがある。
もちろん日記の本来の面白さは事件そのものにあるといふよりも、
日常茶飯事を述べて筆者の主観など
とても現はれさうにないところに
その主観がおのづからにじみ出てあるところにある。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「日本の名随筆 別巻 28 日記」作品社

1993(平成5)年6月25日第1刷発行

底本の親本:「三木清全集 第一二巻」岩波書店

1967(昭和42)年9月発行

入力:浦山敦子

校正:noriko saito

2010年3月3日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

マルクス主義と唯物論

三木清

言葉は魔術的なはたらきをする。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

底本の親本:「唯物史観と現代の意識」岩波書店

1928(昭和3)年5月刊

初出:「思想」

1927(昭和2)年8月号

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、

学術記号の「<<」(非常に小さい、2-67)と「>>」

(非常に大きい、2-68)に代えて入力しました。

※底本の亀甲括弧は、アクセント記号と重複するため、

山括弧の「<」(1-1-50)と「>」(1-1-51)に代えて入力しました。

※本作品は「唯物史観と現代の意識」に

第2章として収録されています。

※誤植の確認には「三木清全集第三巻」岩波書店、

1966(昭和41)年12月17日発行を参照しました。

入力:文子

校正:川山隆

2011年10月12日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の果樹園

三木清

豊かな果樹園をつくるのは
貴い魂にふさわしい仕事だ。

by 三木清

私も私の果樹園をつくろう。

by 三木清

編集:江川剛史

文章:青空文庫

底本:「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966(昭和41)年5月30日初版発行

1975(昭和50)年5月30日初版第14刷

入力:文子

校正:川山隆

2007年1月3日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。